

國學院大學學術情報リポジトリ

第三人称人物主体「〈…む〉とす」表現の読解：
その「む」の多くを意志と認識するのは共同幻想か

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 幸弘, Nakamura, Yukihiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000464

第三人称人物主体「〈…む〉とす」表現の読解

—その「む」の多くを意志と認識するのは共同幻想か—

中村幸弘

まえがき

日記・随筆というような筆者として執筆された文章においても、物語など虚構をもって作者として創作執筆された文章においても、自己以外の他者の内心を描写することは、そもそも不可能なはずである。しかし、現代語の第三人称人物主体「…(よ)うとする」表現ほどではないが、古典語時代の執筆者たちも、第三人称人物の意志を「〈…む〉とす」表現を用いて描写している。もちろん、その「〈…む〉とす」表現の「む」の

すべてが意志を表すものではない。本来は、第一人称主体「…む」とす」表現に限られたはずの、主体の意志を表す「〈…む〉とす」表現であったのに、どのような過程を経て、第三人称人物主体「…(よ)うとする」表現を主体人物の意志を表す表現へと転換させてきたのであろうか。それにしても、第三人称人物主体「〈…む〉とす」表現については、現行の多くの現代語訳書を見ても、その「む」を意志と見た結果の「…(よ)うとする」訳が多い。そこで、時に、それは読みとりの誤りではないかと、と疑い、迷わせられ、どの注釈書を見ても同じだったりすると、共同幻想に陥っているのではないかなどと、そういう不安に陥

ることもある。当初、第三人称主体に应じる「む」文末文の「む」は、推量の意以外存在しなかつたはずだからである。したがって、その「む」を推量と読みとらなければならぬ第三人称人物主体「〈…む〉とす」表現も、予想以上に多く見られるのである。以下、この問題の原点となる助動詞「む」の意味と主体の人称との関係から確認を重ねて、現在に近いさきごろまで、筆者の認識が不安定な状況にあった第三人称人物主体「〈…む〉とす」表現の適切な理解に向けての具体的な読解を試みたいと思う。

一、助動詞「む」の意味と主体の人称との相関性

助動詞「む」の意味とその動作主体との相関性については、いまや、高校生向け学習参考書にも定着して久しい学習事項となっている。いま、そのどこにも見られる解説を紹介するならば、以下のとおりである。ただ、ここでは、小稿にいう主体は、主語と呼んで取り扱われる。

○「む」「むず」の意味の識別

主語の人称により、意味はおおよそ判別できる。

・主語が一人称(私・自分)の場合―意志

・主語が二人称(あなた)の場合―勧誘・適当
・主語が三人称(第三者・事物)の場合―推量

右の解説は、おおむね通用するといつてよいが、そこに「むず」を含めることについては、慎重でなければならなかつた。時に、大きな誤解を呼び込むことになるからである。その三人称主語の用例として、そこに「むとす」の用例が引かれたりするのには、「むず」は「むとす」の約音化したものだから、「むとす」もまた「む」と同じと思つてしまつたからであろうか。加えて、「とす」を単なる強調とする注までが見られるのである。いま、全国一の採択を誇る、その学習参考書が、そこに「やがて掻きつくまゝに頸のほどを食はんとす。」(徒然草・八九)を引いてしまつていたのである。その「ん」は意志であるから、その原則には当て嵌まらないとして、例外扱いしていたのである。第三人称の人物を主体とした「むとす」文末の用例はしばしば見るところで、しかも、大まかにいつて中古からも、その「む」に意志を表す用例が見られるので、この表現は例外などではないのである。それに、少し深く読んでみると、猫またが「食はんとす。」というのには、食いかかる直前にまで事態が迫っていることを描写しているだけなのではないか、とも見えてくるのである。その「ん」は、猫またの意志を表すものではない、

とも、筆者には読めてしまっているのである。

とにかく、大きな誤解は、猫またの「食はんとす。」の「ん」が意志を表すのを例外としている取り扱いである。そのような誤解を生ませたのは、国文法界が「むとす」に全く注目するところがないままだったからである。国文法書のすべてが助動詞「む」に併せて「むず」についてもその用例を引き、「む」に準じて解してよいとして、「むとす」に触れることが全くなかった。『枕草子』（一八六）の約音化した「むずる」をそのまま受けとめて、具体的用例に即して解明しないままだったのである。加えて、「とす」についての認識も不十分だった。「むとす」についての認識の不足が、この誤解を生んだのであった。

小稿は、教育現場から寄せられた質問に応じた前稿「〈…む〉とす」表現の読解と問題点―主体の人称と意志の有無とに注目して―を、さらに発展させたものである。したがって、前稿の論述や用例と重なるところもあるが、本文読解において最も悩まされるところに焦点を絞り、さらに、前稿末尾に予告した疑点二点を説明しようとしたものである。幸いにして、小稿は施注の必要なく展開させることができた。和文の「むとす」を「〈…む〉とす」表現として認識し、適切に読みとろうとする読者には、煩わしさをなく読んでいただけたらと思う。用例資料も、

前稿と同じく、すべて、新編日本古典文学全集に収録されている中古の作品に限ることとした。この該当用例分析の過程で、「むとす」から発展した「むとすらむ」、「むとす」の約音とされる「むず」、さらに「むずらむ」などについても、その「む」の読み分けの必要に迫られることはないのか、と思えてきた。また、あの猫またの「食はんとす。」の取り扱いについては、現場的な模範解答に合わせる、模範解説が必要であろうという思いと期待とが去来して、現在、なお消えていない。

二、「…む」を受ける指定の複合辞「とす」の認識

指定の助動詞「と」と指定の助動詞「す」とに注目したのは、時枝文法であった。ただ、「とす」として取り上げていたわけではないが、「とす」の「と」についても、「とす」の「す」についても注目している。そこで、辞典立項などの術語を借りると、連語ということになり、連語助動詞ということにもなる。そして、近年、一部の日本語文法の世界では、連語助詞・連語助動詞を複合辞と呼んで取り扱ってもいるようである。確かに、「とす」は、「とす」として一定の機能を発揮する。その一方で、「と」に引用の格助詞性も見え、「す」に自動詞・他動詞の別も

感得される。

「とす」は、体言性の語句を受けて、そういうものとして位置づける指定の機能を担うことになった。上代漢字文献の訓読用例から、それは容易に確認できる。「大穴牟遲神に袋を負せて、従者と為て」（古事記・上・75ペ）「其の我が女須世理毘売を適妻と為て」（古事記・上・85ペ）「此の天皇沙本毘売を以て后と為し時に」（古事記・中・198ペ）などの「とす」である。その後、その「とす」は、活用語をも受けて、具体的にいえば動詞終止形を受けて、一定の動作に方向づける表現を構成することにもなった。和歌の「待つとせしまに」（古今・⑮恋五・七七〇）「かくるとすれど」（古今⑬恋三・六七二）などから、また、物語の「まうづとしけれど」（伊勢・二三）「つつむとすれど」（源氏・東屋）などから、その表現形式の存在が認識される。もちろん、「とす」は、それらとは比較にならないほど大量に、助動詞「む」を下接した「動詞+む」を受ける用例を見せる。その由来については、和文そのものに始まるともいわれるが、漢文訓読からの影響は無視できないであろう。その「むとす」は、単に「動詞+む」に「とす」が付いているものもあるが、中古の仮名文献を見ても、助動詞「む」で終わる文を「とす」が受けていると見えてくるところから、「へ…

む」とす」として読み解くことが望ましいと判断している。前稿において「へ…む」とす」表現と呼び、小稿もそれに倣う所である。

「へ…む」とす」表現のうち、最も明快に読み分けられるのは、第三人称のうちの無意志物を主体とするもので、その「む」は推量であり、「す」は自動詞であると判断される。「へ…む」とす」表現のなかで、最も鮮やかに読み分けられる一群である。続いて、第一人称主体「へ…む」とす」表現が注目されて、その多くが、「む」は意志、「す」は他動詞と読みとれた。この一群も、容易に判読できる。しかし、僅かだが、「む」が推量、「す」が自動詞と読みとれる第一人称主体「へ…む」とす」表現も存在した。注目したい。人称を移した第二人称主体「へ…む」とす」表現は、用例が極めて限られて、疑問文としての用例で、不定語や問いの係助詞と関連して、「む」が推量を意味するものという意味を意味するものが存在した。それらだけでなく、神託と違ってよいお告げのなかに見る用例が見られもしたのである。第三人称人物主体「へ…む」とす」表現には、「む」が推量、「す」が自動詞と読みとれる用例が、予想以上多く存在した。ただ、現代人は、その「む」を意志と読みとるのではないかとも思えた。そして、いま一群、「む」が意志、「す」が他動詞と

読みとれる一群が存在した。小稿は、この人称の「〈…む〉とす」表現に絞って、その「む」に意志の意が担われるようになった経緯と、そこに見られる敬語表現との関連についての検討を目的としている。前稿に予告したところである。

実は、「とす」を伴わない段階では推量を表すことのなかった第一人称人物主体「〈…む〉とす」表現にも、その「む」が推量の意を担うことになる用例が見られたのである。疑問文であることも併せて見られたのであるが、いずれにしても、ここにも、推量の「む」が意志の「む」に転換していて、それは、主体意識の転換という現象ということになる。第三人称人物主体「〈…む〉とす」表現の「む」が意志の意を担う用例とは逆方向の転換ではあるが、転換するという点では共通するものと見てよいであろう。

「〈…む〉とす」表現は、以上とは別の視点からの考察も必要となっていた。それは、「…むとす」と見たほうがよいかと思われ、その「む」の直上の動詞の動作・作用などの直前段階にあつて、事態がその方向に向けて進行していく状況を描写する表現ではないかとも見えてきたからである。この視点については、現代語の複合辞「…(よ)うとする」から気づかされた、と、いま、反省している。

三、主体無意志情況時の第三人称人物主体「〈…む〉とす」表現の再確認

第三人称人物主体「〈…む〉とす」表現は、第三人称人物主体の「む」文末文に「とす」が付いたものである。その第三人称人物主体の「む」文末文の「む」は、推量の意をしか表さない。したがって、その第三人称人物主体が無意志情況にあるならば、その第三人称人物主体「〈…む〉とす」表現の「む」も、推量の意のままである。第三人称無意志物「〈…む〉とす」表現と同じことになる。ところが、その第三人称人物主体が有意志情況になった場合には、その第三人称人物主体「〈…む〉とす」表現の「む」は、意志の意を表すことになる。そこで、その主体無意志情況時の用例について、前稿にも引いた用例によって、いま一度、その「む」が推量であることを確認していくこととする。

- (1) …、くに 国の守、みや 斎の宮の頭かけたる、かり 狩の使ありと聞きて、
よ 夜ひと夜、よ 酒飲みしければ、〔狩ノ使ノ昔男ハ〕〔伊勢ノ斎宮ノ女性ニ〕もはらあひごともえせで〔伊勢ノ斎宮ノ女性

〔八〕〈明けば〔狩ノ使ノ昔男〕_m 〔カレ〕_n 尾張の国へたちなむ〉とすれば、男も人しれず血の涙を流せど、えあはず。(伊勢・六十九・狩の使・174p)

早速、該当部分を、「む」文末文にしてみよう。「明けば〔狩ノ使ノ昔男〕_m 尾張の国へたちなむ。」となる。その人物主体「狩ノ使ノ昔男」が無意志情況時にあるので、その「〔…む〕とす」表現は、「明けば〔狩ノ使ノ昔男〕_m 〔カレ〕_n 尾張の国へたちなむ」とすれば、「_m」という第三人称のままなので、「む」は推量のままと確認できるであろう。その確認は、「ワレ」に転換できないといってもよいであろう。続く「男も人しれず」からも、そこまでが伊勢の齋宮の女性を受けとめた心象の描写というようにも見えてこよう。

(2) 少弐、任はてて (〔乳母ノ夫ノ太宰少弐〕_m 〔カレ〕_n 上りなむ) とするに、遙けきほどに、ことなる勢ひなき人は、たゆたひつつすがすがしくも出で立たぬほどに、(〔乳母ノ夫ノ太宰少弐〕_m 〔カレ〕_n 重き病して、死なむ) とする心地にも、この君の十ばかりにもなりたまへるさまのゆゆしきまでをかしげなるを見たてまつりて、…。(源氏・三・玉鬘・

〔三〕・91p)

傍線部 m 「〔…む〕とす」の主体も傍線部 n 「〔…む〕とす」の主体も、ともに「乳母の夫ノ太宰少弐」である。n の「とす」が受ける「む」文末文は「(重き病して死なむ)」と読みとれて、その読点 (、) はトルとして、(重き病して死なむ) としたい。重い病気にかかって死期の近いことが感じとれるところであつて、自死しようなどと思っている情況ではない。その「む」が推量であること、明らかである。戻って、m の「〔上りなむ〕とす」に、「_m」を見たとき、「任はてて」という(任期が終わって)に続いている。任期が終わったら、帰京するのが当然である。(間違ひなく上京することになるだろう) と感じられるが、筑紫からは遠く、財力も関係して、ぐずぐずしているのである。n の「む」が推量であることは前稿において確認済みだが、m についても、当代の「なむ」の「む」は大方が推量で、意志と読まなければならぬ情況にはない。m・n とともに主体人物は少弐で、「カレ」のまままで読んでいくことができるようである。

(3) (〔俊蔭〕_m 〔カレ〕_n 唐土に至らむ) とするほどに、あたの風吹きて、三つある船二つそこなはれぬ。(うつつほ・一・

俊蔭・〔三〕・21p)

俊蔭漂流が始まったところである。既に遣唐使船に乗り組んでいて、時間の推移から見て、〈唐土に到着するであろう〉と感じられる、その間において、という情況の描写である。「ほどに」に連なっているところからも、そう感じとれよう。主体人物は、もちろん俊蔭で、「カレ」のままで読んでいける。

第三人称人物主体「〈…む〉とす」表現の「む」が推量であることと読み分けられる用例は、中古のある時期までは、意志と読みとれる用例よりも多いと見てよいようである。そして、その多くが「む」の上の動詞が尊敬語表現となっている用例である。ただ、それら用例は、追って取り上げることになるので、本節においては、むしろ、その判読に悩むような用例をあえて取り上げるよう努めた次第である。

四、主体有意志情況時の第三人称人物主体「〈…む〉とす」表現の人称転換

第三人称人物主体「〈…む〉とす」表現の「む」は、本来は推量であったと考えなければならぬと思つてゐる。第三人称主体の「む」文末文の「む」は、無意志物主体の場合はこちら

ん、人物主体であつても、すべて推量であつて、「〈…む〉とす」表現の「とす」は、その第三人称人物主体の「む」文末文を受けていることになるからである。そうであるにも拘わらず、主体有意志情況時には、その第三人称人物主体「〈…む〉とす」表現の「む」が意志の意として読みとれるのである。この事実について、いま筆者は、その有意志情況時に、第三人称人物主体を第一人称人物主体に転換させることによって、その「む」に意志の意を担わせたと理解しようとしてゐるのである。なお、ここで、「〈…む〉とす」表現の「む」が意志の意を表す用例番号については、○で囲むことにする。

- ④北きたの方かた、心こころやいかがおはしけむ、つかうまつる御達ごたちの数かずだに思おもはず、寝殿しんでんの放はな出での、また一ひと間まなる落窪おちくぼなる所の、二ふた間まなるになむ住すませたまひける。「君達きみたち」とも言いはず、
- 「御方おんかた」とはまして言いはせたまふべくもあらず。(〔中納言ノ北きたノ方かたニカノ女むすめニワレ〕名なをつけむ)とすれば、さすがに(おとどの思おもす心こころあるべし)とつつみたまひて、「落窪おちくぼの君きみといへ」とのたまへば、人々ひとびともさ言いふ。(落窪おちくぼ・一・(一一)・17ペ)

中納言の北の方のお子たちが多くなか、皇族出の女性腹に生まれた継子の主人公には呼び名もなかったので、「〔中納言ノ北ノ方〕↓〔ワレ〕 名をつけむ」とすれば、「というのである。その「む」は直ちに意志と読みとれてしまおうが、それは、他動詞「つけ(↓つく)」に付いていることにもよろう。ただ、ここで注目したいのは、「む」文末文としての確認である。「〔中納言ノ北ノ方〕 名をつけむ。」は、主体が無意志情況時なら、「〔中納言ノ北ノ方〕 名をつけむ。」で、「む」は推量である。ただ、それに先立つ表現からも、続く「落窪の君と言へ」などからも、中納言の北の方の意志が見えてきて、主体が有意志情況にあると判断され、「〔中納言ノ北ノ方〕 名をつけむ。」となつて通読が可能となるのである。「ワレ」に転換できたということは、第三人称人物主体「(…む)とす」表現を深層において第一人称主体「(…む)とす」表現に転換させた、ということでもあろう。

「(…む)とす」表現は「む」文末文を「とす」が受けて構成されているという生成過程から考えて、その「む」が意志の意を担う第三人称主体「(…む)とす」表現については、そのような主体認識を深層において転換させて成立したと考える以外に、いま適切な考えが浮かんでこない。この考えとして、多くの

不安あるものではあるが、そうとも考えるよりほかないのである。深層において、「カレ」「カノ女」が「ワレ」に転換される瞬間があつたと見るよりほかないのである。

(5)また、十月かむづきばかりに、「それはしも、やんごとなきことあり」とて〔夫ノ兼家〕 〔カレ〕 出でむ。とするに、時雨といふばかりにもあらず、あやにくにあるに、なほ〔夫ノ兼家〕 ↓〔ワレ〕 出でむ。とする。(蜻蛉・上・二〇・113p)

「夫ノ兼家」は放っておけない用事があつて、「出かけるであろう」と感じられる。そんな時に、あいにく雨が降ってきたのだが、それでもやはり、「出かけるであろう」と感じられた、というように、一旦は読みとっておきたい。oの「(出でむ)とするに、」のように「に、」また「ほどに、」などを後続させる場合も、pの「(出でむ)とす。」のように「とす。」で言い切つている場合も、情況の描写が多く、それらの「む」は推量であるからである。ただ、oが兼家の止むなく出かけていく情況を描写しているのに対して、pは雨が降るにも拘わらず出かけていく兼家の心情を述べていて、一瞬、兼家の立場で述べているかにも思わせられるからである。直上の「なほ」が、

そう思わせるのかもしれない。

道綱の母は、夫には敬語を用いていない。そういうこともあつてか、*o*は「〈出でたまはむ〉とするに、」と読めてしまい、*p*は「〈出でむ〉としたまふ。」と読めてしまうようである。*o*・*p*とも、表現形式からは、その「む」は推量で、「す」は自動詞と感じとれる。ただ、当代の長めの一文の展開から、*p*には、兼家が「〔ワレ〕出でむ」と言つて、その行動までが見えてくるようなのである。そうではあるが、そうと言ひ切れないのが、この用例である。現段階では、*p*の「む」もまた推量と見ておかなければならないようである。

⑥…、御直衣、引き掛けて参らせたる、御ひも、ささんとおほしめしたるなめり、〔帝ハ〕〔帝↓ワレ〕ささんとせさせたまへど、御手もはれにたればえさせたまはぬ見る心地ぞ、目もくれて、はかばかしうも見えぬ。(讃岐・上・〔一五〕・41へ)

引き続きいて日記からであるが、物語に多い第三人称人物主体の意志を表す「〈…む〉とす」表現の契機となる用例は、あるいは、日記・随筆など、实在人物について述べたなかに見られ

ないか、と思つたからである。あいにくと、この用例は、時代的にも下つてからのものではあるが、その契機が少しく見えてくる用例である。右は、堀河天皇が戒をお受けになる場面で、直衣の襟にある紐で、左の結び玉を右の輪にさし入れて止めようとお思ひになつた。そこで、天皇が「みずからさし入れよう」となされたけれども、お手も浮腫うはぶくんでいて、おできにならなかつた、と、讃岐典侍が記録している文章である。「〈…む〉とす」の「す」を未然形「せ」にして、二重敬語「させたまふ」を添えて引用する。その「せ」には具体的な動作の動きが感じとれ、「と」が引用する「ささん」が「〔カレ〕ささん」ではなく、「〔ワレ〕ささん」となつて帝の意志を表しているものと読みとれる。この表現が構成された背景には、あらかじめ述べられた波線部「ささんとおほしめしたるなめり」があるといつてよいであろう。さて、第三人称人物主体「〈…む〉とす」表現で、「む」が意志の意となる用例は、物語のなかの登場人物が、会話文のなかで、第三人称人物主体の意志を心内文として語る際に現れることが多いように気づかされた。

⑦…、若き人々、「いでや、おほよそ人だに、今日けふの物見には、大将殿をこそは、あやしき山がつさへ〔あやしき山がつ

↓ワレ」〈見たてまつらん〉とすなれ。…とて、…。(源氏・二・葵・(四)・21ペ)

新齋院御殿こしげいんごどのの日を前にして、若い女房たちが話し合っているところで、山賤やまがたの〈拜見しよう〉という声を伝聞形式で話題にしている。第三人称人物主体「へ…む」とす」表現であるが、その表現を深層において、第一人称「へ…む」とす」表現に転換させて伝聞の助動詞「なれ(↓なり)」を添えている。その心内文において、客体尊敬の謙讓語補助動詞「たてまつる」を添えて「見たてまつらん」としている点も、意志の姿勢を闡明しているといえよう。そして、やがては、地の文のなかに、意志の意を表す第三人称人物主体「へ…む」とす」表現として採用され、定着していったものと見えてくる。

⑧大将殿には、二十七日日出で来たる乙子おとこねになむ、嵯峨の院に「左大将正頼↓ワレ」御賀参らむ」としたまひける。(うつつほ・一・嵯峨の院・(三二)・367ペ)

右の「大将殿」とは、左大将正頼のことである。その左大将正頼が「嵯峨の院で後の宮の六十の算賀をお祝いもうしあげよ

う」ということで、その手配をお進めになった、というのである。「大将殿には、」は、文末の「したまひける。」がこれに応じていて、この一文の主体となる人物である。その「…には、」が、尊敬の表現を構成している。そこで、その「へ…御賀を参らん」としの主体人物も左大将正頼ということになるが、その「正頼」を「カレ」ではなく、深層において「ワレ」に転換させているものとして読みとれる表現となっているのである。ここでも、その動作が、「御賀参る」の「参る」という謙讓語動詞を用いて表現されている。意志の表現であることを闡明する謙讓語動詞である。加えて、次節において詳説する尊敬語の補助動詞「たまひ(↓たまふ)」が、その意志の意を担う「…むとし(↓むとす)」に添えられている。その「む」が意志であること、明白である。

以上、第三人称人物主体「へ…む」とす」表現のうちの「む」が意志の意を表す④・⑥・⑦・⑧の用例について、人称転換という視点から確認してみた。ただ、中古の「へ…む」とす」表現全体から見るとき、この一群は、必ずしも多くはないというのが、その印象である。

五、「(…む) とす」表現の「む」が尊敬語表現を受ける用例

「(…む) とす」表現の「む」が尊敬語表現を受ける次の用例については、その尊敬語表現が、自敬表現なのか、作者の帝への尊敬語表現なのか、まず悩まされる。さらに、その「む」は、帝の意志なのかについても悩まされる。

(9) これならむと思しおぼて、逃にげて入る袖そでをとらへたまへば、面おもてをふたぎてさぶらへど、初はじめよく御覧ごらんじつれば、類たぐひなくめでたくおぼえさせたまひて、「ゆるさじとす」とて、**〔帝〕** **〔カレ〕** (率ひておはしませむ) とするに、かぐや姫答へて奏す。(竹取・二七)・61.べ)

帝が狩をよそおって、かぐや姫に会いに行き、「率ておはしませむ」とする「場面である。実は、続いて、以下のように展開されていて、そこにも「率ておはしませむ」という表現が現れるのである。

○「おのが身は、この国に生まれはべらばこそ、使ひたまはめ、いと率ておはしませむがたくやはべらむ」と奏す。帝、「なごかさあらむ。なほ率ておはしませむ」とて、御輿おんしを寄せたまふに、そのかぐや姫、きと影かげになりぬ。(同右)

帝の発言に見る「率ておはしませむ」は、その直上の副詞が(やはり)の意であるところから、その「む」が意志を表すと見てよく、そこでその「率ておはしませむ」は、自敬表現と見てよい用例である。しかし、(9)の「率ておはしませむ」とするに、「は、帝が(連れていらつしやることになるであろう)と感じられる、その時に、ということ、帝の意志は現に「ゆるさじとす」に表されているのである。この情況の描写や、次のかぐや姫の発言のなかの「率ておはしませむ(がたく)」などに引かれて、帝の発言のなかの自敬表現となったもので、これは、物語執筆者の意識の問題でもある。念のため言い添えると、(9)は、「(帝)〔カレ〕率ておはしませむ」とするに、「のまま読んでいくところだったのである。あるいは、率て行くという事態に向けて進行する、その直前にある情況の描写ともいえようか。

さて、尊敬語表現のなかには、二方向への敬語という尊敬語

表現も含まれる。その用例は、複数の人物が登場する場面において、意外なほどにしばしば見られるところである。

(10) 皇子はかくてもいと御覽ぜまほしけれど、かかるほどにさぶらひたまふ例なきことなれば、(〔第二皇子〕カレ)、まか、たまひなむ)とす。(源氏・一・桐壺・(五)・24べ)

母の桐壺の更衣亡き後、つまり、母亡き後、その皇子が宮中におとどまりになる前例がないところから、(その第二皇子は間違ひなく退出なさることになるであろう)と感じられた、というのである。その「む」を、皇子の意志と見ることはできない。先師・今泉忠義遺著『源氏物語法篇』(桜楓社・昭和五十二年)は、同じ桐壺の巻のこの箇所先立つ「まかでなんとし給ふを」のところで、この「まかで給ひなんとす」との相違をどう理解したらよいか、問題提起している。先師は、尊敬語「給ふ」をどこに用いるかを国語史の面から考える方向に向けてのヒントを述べておられるが、筆者は、その問題を「(…む)とす」表現の「む」が推量の意を担ってその状況を描写する表現であるか、それとも、「む」が主体人物の意志を表してその方向に向けての動きを述べる表現であるかによる相違であろう

と見ている。

先師が既に指摘しているように、この、「(…む)とす」表現の「む」が尊敬語表現を受ける用例のほうが、圧倒的に多い。先師もそこに引く、その用例のなから、いま一用例、引くこととする。

(11) (〔大后〕カノ女)も参り、たまはむ)とするを、中宮のかくおはするに御心おかれて、思しやすらふほどに、おどろおどろしきさまにもおはしませで隠れさせたまひぬ。(源氏・二・賢木・(一〇)・97べ)

桐壺院崩御直前、弘徽殿の大后も、藤壺の中宮が付き添っていらつしやるので遠慮された、というのである。その、桐壺院のご臨終というところで、(大后もお見舞いに参上なさることになるであろう)と感じとれたが、というのである。「大后も」の「大后」を「ワレ」に転換させてはならない。「(…む)とす」表現の「む」の上に尊敬語表現があるということは、情況描写が始まっている、ということである。その「む」を意志と読むことは無理である。

六、「(…む) とす」表現の「す」が尊敬語表現化されるということ

「(…む) とす」表現の「む」が意志の意を表すと読みとれたとき、その「す」には、積極的に振る舞う他動詞性が感じられるようである。現に取り上げてきた用例④・⑥・⑦・⑧に、再度当たってみても、そう感じとれる。さらに、これから見ていくこととする用例が、その「す」に尊敬語の補助動詞を添えるということとは、そういうことだ、他動詞性が存在するということだ、と思っている。

⑫その年の夏、御息所みやすじころ、はかなき心地にわづらひて、**〔母ノ御息所ハ〕** **〔母ノ御息所〕** ↓ **〔ワレ〕** **〔まかでなん〕** としたまふを暇いとまさらにゆるませたまはず。(源氏・一・桐壺・(四)・21 ぺ)

母の御息所は、ちょっとした病気で養生のため、宮中からの退出を願ひ出た、というのである。「まかでたまひなん」とするを、「であったとしたら、本人の意志でなく、周囲の状況か

ら(退出なさることになるであろう)と感じられたが、ということになるが、ここは、異例の願ひ出をあえてしたことが読みとられなければならない表現となっているのである。「したまふ」の「し(↓す)」には、敢行の動きが見える。だから、「暇さらにゆるませたまはず。」となるのである。「まかでなん」としたまふを、「の主体人物としての「母ノ御息所」は、「カノ女」のままではなく、「ワレ」に転換されているのである。

⑬…、とざまかうざまにもて離れんことを思して、**〔姉ノ大君ハ〕** **〔姉ノ大君〕** ↓ **〔ワレ〕** **〔かたちをも変へてん〕** としたまひしぞかし、かならずさるさまにてぞおはしまし、…、と恥づかしく悲しく思せど、…。(源氏・五・宿木・(二六)・384 ぺ)

匂宮と六の宮とが婚約、中の君の不安は募り、亡き姉の大君を思い出している、長い心内文のなかに見る用例である。薫を避けて、(いっそ、世俗の姿を出家人道の姿に変えてしまおう)と、姉の大君がその姿勢をお示しになった、と思ひ出しているのである。動作主体「姉ノ大君」を「カノ女」のままにしておかないで、「ワレ」に転換させて、表現しているのである。「(…

む」とす」表現の「む」が推量である場合、その「む」の上に助動詞「ぬ」の未然形「な」を冠した「(…なむ」とす」を間々見てきたが、この用例は、助動詞「つ」の未然形「て」を「む」の上に冠して、「(…てむ」とす」となっている。注目しておきたい。

⑭童なる子の言ふやう、「すべて上のあしくしたまへるぞ。

何しに部屋に籠めたまひて、かく〔母ナル中納言ノ北ノ

方ハ〕〔母ナル中納言ノ北ノ方〕↓〔ワレ〕をこなる者に

あはせむ」としたまひしぞ。…」とおよずけ言へば、…。

(落窪・二・(一四)・142ペ)

「童なる子」は三郎君のことで、落窪の君びい最ま辰きである。その落窪の君は、あこぎの機転で、窮地を脱しはしたが、北の方の企みで典薬の助に襲われそうになる。その母なる北の方の悪巧みなどを、三郎君がませた批判をしているところである。へこの君にあはせむ」の主体人物は、「母ナル中納言ノ北ノ方」であるが、その「母ナル中納言ノ北ノ方」を「カノ女」のままにしておかないで、「ワレ」に人称転換させて読んでいく構造の表現だったのである。

七、ある事態の直前、その到着点に迫り来る意を表す複合辞「むとす」への転化

「(…む」とす」表現について、筆者は、その「む」が文末となる「む」文末文を「とす」が受けて構成されているものと見ている。そう思うところから、「(…む」とす」表現と表記し、そう呼ぶことにしたのである。

さて、第三人称主体「む」文末文の「む」は、推量の意を表すものに限られることが多くの先達によって明らかにされている。したがって、第三人称無意志物主体「(…む」とす」表現の「む」は、すべて推量の意であった。ところが、第三人称人物主体「(…む」とす」表現の「む」について見たとき、その「む」には、推量の意を表すものと、意志の意を表すものとが見られたのである。推量の意を表す「む」文末文を「とす」が受けて構成されている「(…む」とす」表現であるのに、どうして「む」が意志の意となるものが現れるのか、大きな疑問である。

そこで、筆者は、その意志の意を表す第三人称人物主体「(…む」とす」表現が現れる理由について、表現する瞬間に、深層において人称の転換をさせるからだと考えたことにした。第三

人称主体と応じていた「む」を第一人称主体に応じるものとして意志へと転換させたのであろうと見ることにしたのである。

小稿は、そのような問題の解明に努めてきたが、そういうこととは別の観点から受けとめなければならない転化もあったのではないかと感じられてきたのである。それは、当初、第三人称無意志物主体「へ…む」とす」表現用例を見ていて、そう見えてきたのである。ある事態の直前、その到達点に迫り来る意を表す複合辞「むとす」と見えてきたのである。

○かかるほどに、九月二十日ばかりの夜、風いとはるかに聞こえて、しぐれなむとす。(うつほ・一・嵯峨の院、一一二)・
322 べ)

侍従仲忠は、兄弟の契りを結んだ仲澄を訪ねて、正頼の三条邸に出入りするようになったが、実はひそかにあて宮に近づきたい思いがあった。そうこうしているうちに晩秋になって、(間違ひなく、いまにも時雨が降るであろう)と感じられた、というのである。それは時雨の直前で、(時雨れる)方向に向けて近づいていく状況としても受けとめられた。

その、ある事態の直前、その方向に向けて進行している状況

が見えてくるという点では、第三人称人物主体「へ…む」とす」表現のうちの、「む」が推量の意のものには、さらに重なって読みとれる用例が見えてきた。

○…、たゆたひつつすがすがしくも出で立たぬほどに、重き病して、死なむとする心地にも、…。(用例②)であるが、
符号は違えてある)

まず、帰京の段取りもままならないでいるうちに、(重い病気にかかって死んでいくであろう)と感じられる気持ちにも、と受けとめられる。用例②として見てきたところである。そして、併せて、それは、病気で死の直前にあつて、その(死ぬ)方向に向けて迫っていく状況が受けとめられてきたのである。新全集『源氏物語』校訂者の、その読点(、)は、そこを意識してのことだったのであろうか。そこを、太宰少弐が今後について推量していると読んだ第三節の筆者は、助動詞「む」が本来有する文法的な意味を意識して読んでしまったからではないか、とも思えてきたようである。

さらにいうと、用例⑨についても、既に、実は、ある事態に向けて進行する、その直前にある状況の描写か、とも見ていた

のである。

○…、初めよく御覽じつれば、類なくめでたくおぼえさせたまひて、「ゆるさじとす」とて、率ておはしまさむとするに、…。(用例(9)であるが、符号は違えてある)

それにしても、この「(…む)とす」表現について考察する契機となった猫またの「食はんとす。」などについては、とりあえず第三人称人物主体「(…む)とす」表現の「む」をどう判断するかなど、放置したままになっているが、現在は、とにかく、猫またの意志と見ることにだけ、躊躇を覚える。そこで、猫またに類した、『竹取物語』での、くらもちの皇子が出会ったと嘘のつくり話をするところに出てくる「鬼のやうなるもの」の描写を見つめることにする。

⑮皇子、答へてのたまはく、「…、ある時には、風につけて知らぬ国に吹き寄せられて、鬼のやうなるものいで来て、〔鬼ノヤウナルモノハ〕〔鬼ノヤウナルモノ〕↓ワレ〕殺さむ」としき。…とのおたまへば、…。(竹取・(七)・31p)

一旦、そう読んだうえで、次のようにも見えてきたのである。

○皇子、答へてのたまはく、「…、鬼のやうなるものいで来て、殺さむとしき。…」と…。(同右)

それは、殺害という事態の直前、その(殺す)方向に向けて追ってくる情況としても捉えられたのである。「むとし(…むとす)」の複合辞化による新しい機能が見えてきたようでもある。そして、あるいは、それも、現代語についての複合辞という取り扱いを、知識として得たことが背景にあったのか、と、内省されるのである。

八、現代語複合辞「…(よ)うとする」への移行

「(…む)とす」であろうと「むとす」であろうと、その現代語訳は、極めて容易であると思われる。『む』は「う」か「よう」でよいし、「と」は「と」のままでもよく、「す」は活用形態を若干変えた「する」に言い換えればよいからである。したがって、古典語「むとす」は、直ちに現代語「(よ)うと

する」に言い換えられて、悩むところがないと思われている。しかし、それが、大きな誤解を生む陥穽となっていたのである。現代語の「う」「よう」は、推量の意味があるとはいっても、それは限られた表現のなかにしか見られなくなっていて、その殆どが、意志を表すものとして用いられるようになってしまっていたからである。現代人にとって、「う」「よう」は、意志をしか意味しなくなってしまうからである。

現代人にとって、「う」「よう」は意志の意味だけとなっているので、古典語「〈…む〉とす」「むとす」の現代語訳は、すべて意志を表すものと解されてしまうのである。仮に訳者が推量の「う」「よう」として「…(よ)うとする」と訳しても、その「う」「よう」は、読者には、意志として読まれてしまうのである。いま、古典作品のなかの「〈…む〉とす」「むとす」の現代語訳は、全面的に見直しが必要などころにあるといえるのである。

いまでは、遠い昔になるが、中村通夫『東京語の性格』（川田書房・昭和二十二年）／松村明『江戸東京語の研究』（東京堂出版・昭和三十二年）が、推量を意味する「う」「よう」の急激な衰退を教えてくれてあった。推量は、「だろう」で表現するようになる。その推移についても教えてくれてあった。

それだけではない。「〈…む〉とす」「むとす」を「…(よ)うとする」に向けて現代語訳と称して移行しても、その「…(よ)うとする」そのものをどう受けとめたらよいかで悩まされている現況にある。『日本国語大辞典第二版』の「う」の項のブランチ⑦に「…(よ)うとする」の形で、動作・作用の行われる直前の状態であることを表す。」とある用法も、「よう」の項のブランチ③に「(と)する」を伴って、動作・作用がおこる直前の状態にあることを表す。」とある用法も、ともにブランチ立項されている。 「…(よ)うとする」の「むとす」から転化した用法について教えてくれるのだが、古典作品の現代語訳となると、どういうわけか、その「う」「よう」を意志と読みとってしまっているようなのである。多くの現場向け品詞分解ものからも、そういうのである。あるいは、「将」字などの訓読語の「(まさに) …むとす」の「むとす」が影響しているのであらうか。

森田良行・松木正恵著『日本語表現文法』（株式会社アルク・一九八九年）の「助動詞と同様の働きをする表現」の五に「意志・超意志を示す」とあり、その1に「意志・決意」とあって、そこに「(よ)うとする」が立項されていて、出会えた喜びを感じた日があった。複合辞という術語も、同書から頂戴して重

宝している。ただ、ここでも、見出しにいう意志・決意に相当する用例と、そうではない用例との読み分けについての、いっそう行き届いた手掛かりが得たい思いが残った。いま、その該当用例の検索を心掛け、その読み分けに努めている。恥ずかしいことに、現代日本語の素養にも欠けた自身がそこにいたたいたのである。

今回、中古の和文作品のなかの「へ…む」とす」「むとす」表現を見てきたが、作品による使用頻度にも偏りが見られた。また、いま振り返ると、すべてを、「…(よ)うとする」に移行するだけの訳出と、そうでもない訳出とが見られたようにも思われる。殊に、その「む」が推量としか読めない場合の現代語訳には、幾つか言い回しの違いが見られた。第三人称人物主体「へ…む」とす」表現の「む」が推量の意を表す場合の理解は、それほど現代人には遠くなっているということであろう。その問題も含めて、とにかく、一見平易に見えたがゆえに、注目されないままの「へ…む」とす」表現であったといえよう。

あとがき

小稿は、前稿「へ…む」とす」表現の読解と問題点―主体の

人称と意志の有無とに注目して―と併せてお読みいただきたい。前稿と重ねてご活用いただきたい。そして、ご指導いただきたい。

小稿そのものが、第三人称人物主体「へ…む」とす」表現のすべてを解明しえたわけではない。そうではあっても、第三人称人物主体「へ…む」とす」表現の「む」が意志を表す用例についての教室での説明には、ご採用いただける教授資料となりえたであろうとも思っている。先師・今泉忠義遺著にお書き遺しの、あの「まかでなんとし給ふを」と「まかで給ひなんとす」との問題については、その相違が、「む」の意味の違いにあることが見えてきた。しかし、ある事態の直前においてそこに向けて進行する意を表す「むとす」への転化については、不明瞭なところ多い指摘にとどまった。他にも、疑問や関心を示すにとどまる事柄を多く残している。

それにしても、その「む」が十分に推量と読みとれる用例についてまで、その「む」を意志と読みとる第三人称人物主体「へ…む」とす」表現の現代語訳が多く見られる。世の諸注釈書に「共同幻想か」と憤った日があったり、異常な誤読を繰り返しているのは、己おのれかと自ら責めた日があったりしての、敢えての決断の脱稿である。